

研究種目：基盤研究（C）
研究期間：2007～2010
課題番号：19530633
研究課題名（和文） 児童養護施設入所児童の発達と可塑性 サクセスフル・アダプテーションを支える要因
研究課題名（英文） The development and resilience of institutionalized children: factors underlying successful adaptation
研究代表者
向井 隆代（MUKAI TAKAYO）
聖心女子大学・文学部・准教授
研究者番号：00282252

研究代表者の専門分野：社会科学
科研費の分科・細目：心理学・臨床心理学
キーワード：施設入所児童・心理社会的発達・可塑性・縦断的研究・適応

1. 研究計画の概要

発達初期に何らかの障害をもっていたり、生育環境に不利な要因が含まれていたりする、いわゆるリスク・グループの発達を追跡するにあたり、特に適応を支える保護因子の解明を目指すことが本研究の目的である。

児童養護施設に入所している未就学の幼児を調査対象とし、協力施設での子どもや職員を対象とする面接調査、職員を対象とする質問紙調査を継続して行い、乳幼児期のリスクと現時点での適応、さらに小学校入学以降の適応との関連を明らかにする。

2. 研究の進捗状況

（1）施設入所中の未就学児童についての基礎的情報（デモグラフィックな情報、乳幼児期の基礎的情報、気質の特徴、現在の適応状態等）の収集はほぼ終了したが、家庭引取りになるケースや年度途中に入所するケースもあり、追加情報の収集は今後も継続して行う。

（2）面接調査によって行っている関連因子（語彙力、感情理解、自己効力感、対人関係の枠組み、家族イメージ）のデータ収集はほぼ順調に進行している。また、新たな保護因子として実行機能の測定にも着手した。年中児から小学校低学年までのそれぞれの年齢・発達段階に適した査定道具の開発や測定学的特長の確認も行いながら研究を進めている。職員対象の調査（発達期待、しつけ方略、担当児との愛着等）はほぼ予定通りに進んでいる。

（3）今後、対象児童の年齢が上がるにともない、小学校入学後の適応の指標として特に学習面や社会面での適応を測定していく予

定であるが、測定方法の精緻化が重要な課題である。

また、得られている結果の解釈に関して、同年齢の対照児童との比較が必ずしも適切ではない場合も多く、量的な比較のみでなく入所児童の縦断的变化をとらえるケース研究の視点からの解釈も行っていく必要がある。

3. 現在までの達成度

おおむね順調に進展している。

（理由）

特に施設入所児童や職員からのデータ収集に関してはほぼ順調に進展している。しかし、特に面接調査の内容のデータ分析に時間がかかり、結果の公表に関しては当初の予定よりやや遅れている。

また、職員対象の質問紙調査の回収が当初の予定よりも遅れたため、データ入力終了したもののまだ解析に至っていない。

しかしながら、調査対象児童の経年変化を追跡することによって、幼児期の知的能力や情緒的安定性がその後の語彙力の伸展や対人関係の枠組みの柔軟さ、ひいては自我機能の発達を促進していくことがこれまでの結果から示唆されている。

4. 今後の研究の推進方策

現在、調査対象児童の中で最も年長の児童は小学3年生であるが、学業上の困難や心理社会的側面における問題を呈しやすいのは小学校中学年以降である。したがって、今後も調査を継続して行うことが必要である。

また、4年間すべてのデータが揃っている対象児童の数はまだ限られるものの、縦断的

な分析を行い、成果を公表していくことが今年度の課題である。

Psychiatry, August 28, 2007, Florence, Italy.

5. 代表的な研究成果

(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

[雑誌論文](計2件)

齊藤千鶴、佐伯素子、向井隆代、目良秋子、児童養護施設及び入所児童をめぐる心理学的研究展望、白百合女子大学発達臨床センター紀要、11、29-40、2008、査読無し

齊藤千鶴、佐伯素子、向井隆代、幼児・児童絵画統覚検査(CAT)を用いた幼児の家族・親イメージの実証的検討(1)、白百合女子大学発達臨床センター紀要、10、28-38、2007、査読無し

[学会発表](計6件)

佐伯素子、向井隆代、齊藤千鶴、目良秋子、児童養護施設入所児童の抑制機能と行動特徴(1) サクセスフル・アダプション要因に関する縦断的研究より、日本発達心理学会第20回大会、2009年3月27日、東京

齊藤千鶴、向井隆代、佐伯素子、目良秋子、幼児・児童期の家族ロマンスに関する検討(2)、日本心理臨床学会第27回大会、2008年9月6日、つくば

佐伯素子、向井隆代、齊藤千鶴、幼児期における感情理解の発達 情動性および注意コントロールとの関連、日本発達心理学会第19回大会、2008年3月21日、大阪

佐伯素子、向井隆代、齊藤千鶴、幼児期における自他感情理解の発達を促す要因について 気質および注意のコントロールを中心に、日本心理臨床学会第26回大会、2007年9月28日、東京

齊藤千鶴、向井隆代、佐伯素子、幼児・児童期の家族ロマンスに関する検討(1)、日本心理臨床学会第26回大会、2007年9月29日、東京

Takayo Mukai, Motoko Saeki, & Chizuru Saito. Emotion understanding among institutionalized children in Japan. Poster presented at the 13th International Congress on European Society for Child and Adolescent